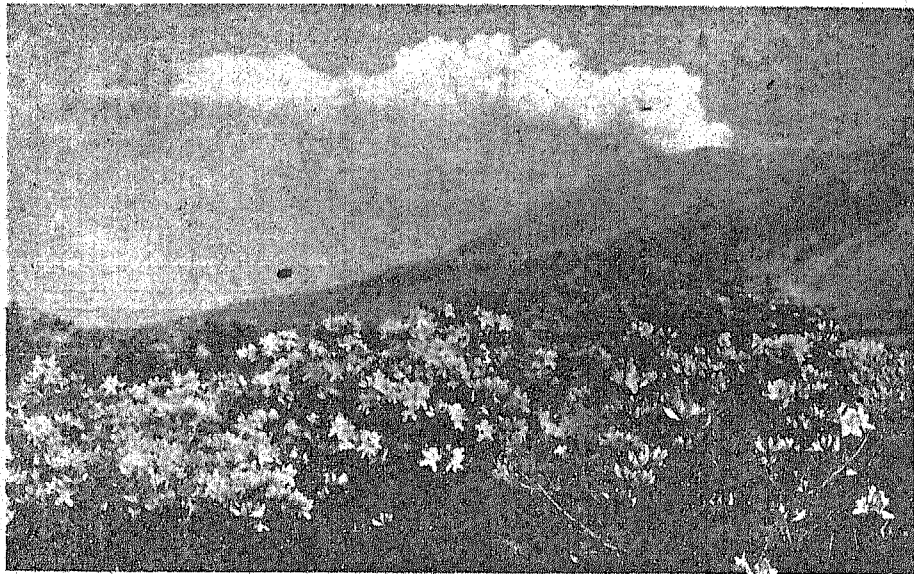


報會曲千

日十二月六年六十和昭

號 六 第

會曲千人法團社



目 次

- △表紙 陽春麗花薫る淺間山麓
- △諏訪神社に就て……………岩本 賢次(一)
- △たばこと……………醉 狂 生(二)
- △母校便り……………(三)
- 修己寮生の自治的修練
- 近來にない猖害
- 紀元二千六百年記念植林
- 井上校長名古屋で講演
- 齋藤實教授新任
- 購買班の賣店一時閉鎖
- △本會記事……………(四)
- △兼任辭令……………(四)
- △會員通信……………(四)
- 校長千曲會
- 蠶二八回
- △計 報……………(五)
- 弔慰金募集及報告
- 噫々渡邊君……………戸塚 生
- △會員勳辭……………(六)
- △指定旅館案内……………(八)

諏訪神社に就て

岩本賢次

信濃國に善光寺のある事を知らぬ者はないが官幣大社諏訪神社の鎮座するを知らぬ人は案外多いかと思はれる老婆心から皇紀二千六百一年に當り敬神崇祖の美風助長の一補にもと敢て其の概要を紹介することにした。母校の學生諸君も修學中に一暇を得て中仙道八里の驛路に往昔を偲びつゝ一度和田峠を越えて信濃一之宮たる諏訪大明神に詣でられん事を勧めたい。官幣大社諏訪神社は御神號を日本第一大軍神諏訪南宮法性大明神など、稱へられ、祭神は健甕名方富命(又は建御名方命)妃八坂刀賣命の二柱にて、大國主命の御子神八重事代主命の弟神に當り從つて健甕須佐之雄命の孫神に當る神である。試みに古事記を繙けば上巻のくだりに「是に天照大御神の詔りたまはく、亦昂の神を遣はして吉けむ。(中略)：僕か子建御雷神を遣す可しと答ひして、乃ち貢進りき。爾天鳥船神を建御雷神に副へて遣しき。是を以て此の二神、出雲國の伊那佐の小濱に降り到きて、(中略)：故爾に其の大國主神に問ひたまはく、今汝が子事代主神、如此白しぬ。亦自す可き子有りやといひたまひき。是に亦白しつらく、亦我が子建御名方神有り。此を除きては無し。如此白したまふ間し、其の建御名方神、千引石を手末に擧げて来て、誰ぞ我が國に来て忍び忍び如此物言ふ。然らば力競爲せ。(中略)：故遣ひ往きて、科野國の洲羽海に迫り到りて殺さむとしまふ時に、建御名方神曰しつらく、恐し、我をな殺したまひそ。此の地を除きては他處に行かじ。亦我が父大國主神の命に遣はじ。八重事代主神の言に遣はじ。此の葦原中國は天神御子の命の隨獻らむとまをしたまひき。」とあり天照大御神の使神建御雷神(官幣大社鹿島神社)に對し父神兄神は逸速く天勅を奉じて國土奉還の意を表したが

一人其の武勇を恃み異心を示し、追はれて諏訪湖神に到つたが、豁然悟つて恭順し爾後此の地を離れず諏訪の國の開拓に盡された。(建御雷神との力競は昨年秋の上野の奉祝美術展に町田川江畫伯によつて「伊那佐の濱」と題し出品された) 一説には妃神八坂刀賣命は天孫降臨に供奉した天降三十二神中の天八坂彦命の女であることに徴しても建御名方命は追ひ詰められた降服したといふ傳は史實でなく、神世既に出雲、越前、美濃方面は交通が開けてゐた處から此の順路により表日本に出だ當時伊勢に往まはれた八坂刀賣命を娶はれて信濃に移住まはれたのであると云はれる。

鬼も角も命は大國主命が「我が御心のはやし」と自ら誇られた全盛時代に、古事記にも其の相愛を禮讃された越國の沼河媛命との間に儲けられた御子たる猛勇の天資を以て御父の國土經略を輔けられ信濃に在つては其の妃と共に民に農耕機織の業を教へ神世の出雲文化を信濃の國に移植され又御子神出速雄命等十三柱は夫々信濃の各縣を開發せられた。故に古來皇室の崇敬篤く持統天皇の五十年には勅使を遣はして祭事を行はせられ、神功皇后息長足媛命が武内宿禰等を帥ゐて韓國を征服した時には住吉明神が軍船を護り、諏訪大明神の御鎮靈は先鋒の武將となつて活躍し武威を大陸に示し日本第一大軍神と崇められた。桓武天皇の御代には坂上田村麿將軍が東夷征討の途次戰勝を祈願し京師に凱旋するや御神助を奏聞して當社式年御造營大祭の起源を造り、又弘安年間元寇の際には龜山上皇勅使を遣はして祈願を蒙られ(時の幕府執權北條時宗は諏訪盛重の養育を受けた人)更に後醍醐天皇の皇子宗良親王は南朝の征東將軍として信濃に入るや神前に參籠して南朝恢復

の祈願を捧げられ下之宮大祝金刺豊久始め諏訪神家一族三十二家、村上、高梨、香坂、仁科等信濃の武將の味方を得て桔梗ヶ原に信濃國守護職として北朝に屬し筑摩の城主小笠原氏と戰つた、又武田信玄等の尊信も厚く芝居「本朝廿四孝」にも諏訪法性の宛と共に採入れられてゐる事は人の能く知る處である。神社境内は上之宮(通稱上社)、下之宮(通稱下社)に分れ、上之宮に本宮(建御名方命、諏訪郡中洲村)、前宮(八坂刀賣命同郡宮川村)が、下之宮に春宮、秋宮(共に二神祭祀、約一萬を數へ殊に長崎市に在る國幣中社諏訪神社は「お諏訪様」と崇められ世人に親しまれてゐる。(全國を通じて分社の數の最も多のは神明、稻荷、八幡及諏訪様である)神位に從五位下に授けられてより數次進められて清和天皇貞觀九年には從一位、朱雀天皇天慶三年(紀元千六百年)には正一位に叙せられた。諏訪南宮法性大明神の御神號を賜つたことは諏訪繪詞に見えてゐる。明治四年國幣中社に列し同二十九年官幣中社に、大正五年十二月には官幣大社に昇格した。御神號は梶の葉三葉を模様化したもので三本梶と稱する、梶は製紙の原料にする楮のごとて御明神様の御着衣の模様であつたといふ古傳から社紋に定められたのである。

上之宮本宮の造營物は幣殿、拜殿、寶殿、神、樂殿、勅使殿、寶庫、廻廊等規模廣大にして現在最も古い四脚門は今を距る三百三十三年前前慶長十三年徳川家康の獻納したものである。本宮には下之宮の如く拜殿の奥に御神殿のない處から一般に官幣大社大神神社と同じく神山を以て御神體と爲すかに信ぜられてゐるが拜殿の奥處が即ち御神體であつて古墳としての塚型は平げられてあるが現に巨石の見える邊りの神痕びた圓が御神體なることは古文書にも記されてゐる。而して廻廊に接した左手の御寶殿が明神の御靈代御神鏡を奉安する御神輿を安置した御神殿であつて此の作

は屋根の兩側の棟風は各一本の板が上迄突抜けて交又し其の儘千木を成し其の千木には三枚の細板を横に着け屋限の葺葺には竹を以て押へとしてある。此の様式は我國最古の型で現今では越後及佐渡の民家に三個所程遺つてゐるばかりであるといふが下之宮春秋二宮の神殿の側面に横木が出てゐる作りと併に我が國最古の建築様式を持續してゐるものである。

境内の面積は九萬八千坪(三二町七反)に餘り老樹古木參々として神威は人に迫り自ら櫛を正さしめる。 神事の主なるものとしては上之宮の例祭を御頭祭と云ひ舊時は三月中の酉の日を選び執行了た處から俗に酉の祭と稱されるが現在四月十五日に行はれ、本宮より大明神の御靈代を奉安した御神輿を前宮に遷座する祭典で、往古は七五個の猪鹿の頭を神前に供へ流籠馬の伎を演じたものである。此の祭事に十八ヶ村中より奉仕する當村を俗に御頭郷と云つた處から御頭祭と稱されるのである。

下之宮に於ては御靈代を奉初め秋宮から春宮へ秋には春宮から秋宮へ遷座し秋宮から春宮へ二月一日であるが、秋八月一日の御遷座祭は御神輿渡御の行列に次て大明神夫妻の船遊びを擬した翁、姫を飾つた柴船を曳く處から御船祭と云はれてゐる。又上、下二宮共に大晦日の宵より元旦にかけて參詣するを二年詣と稱し東京の酉の市の如く繰起を罷り終夜境内は人て埋る賑ひを呈する。

其の他蛙狩、田遊、筒粥、野出、御狩、田植、御射山祭の神事等古風の行事は七十に餘るが當社最大の神事は上下之宮共に七年目毎の寅申相當年に執行はれる式年御柱祭である。之は御神殿を新に造營して神座を遷す御造營御遷宮祭の事である大祭の一行事に御柱曳建の儀があつたのであるが後世社殿改築の事止み御柱曳建のみを行ふ事になつた處から御柱祭と稱するに至つたのである。上之宮本宮は山肌近く鬱蒼たる老樹の下に在つて濕潤の氣に富んでゐる處から七年目位には改築

は屋根の兩側の棟風は各一本の板が上迄突抜けて交又し其の儘千木を成し其の千木には三枚の細板を横に着け屋限の葺葺には竹を以て押へとしてある。此の様式は我國最古の型で現今では越後及佐渡の民家に三個所程遺つてゐるばかりであるといふが下之宮春秋二宮の神殿の側面に横木が出てゐる作りと併に我が國最古の建築様式を持續してゐるものである。

上之宮本宮の造營物は幣殿、拜殿、寶殿、神、樂殿、勅使殿、寶庫、廻廊等規模廣大にして現在最も古い四脚門は今を距る三百三十三年前前慶長十三年徳川家康の獻納したものである。本宮には下之宮の如く拜殿の奥に御神殿のない處から一般に官幣大社大神神社と同じく神山を以て御神體と爲すかに信ぜられてゐるが拜殿の奥處が即ち御神體であつて古墳としての塚型は平げられてあるが現に巨石の見える邊りの神痕びた圓が御神體なることは古文書にも記されてゐる。而して廻廊に接した左手の御寶殿が明神の御靈代御神鏡を奉安する御神輿を安置した御神殿であつて此の作

は屋根の兩側の棟風は各一本の板が上迄突抜けて交又し其の儘千木を成し其の千木には三枚の細板を横に着け屋限の葺葺には竹を以て押へとしてある。此の様式は我國最古の型で現今では越後及佐渡の民家に三個所程遺つてゐるばかりであるといふが下之宮春秋二宮の神殿の側面に横木が出てゐる作りと併に我が國最古の建築様式を持續してゐるものである。

境内の面積は九萬八千坪(三二町七反)に餘り老樹古木參々として神威は人に迫り自ら櫛を正さしめる。 神事の主なるものとしては上之宮の例祭を御頭祭と云ひ舊時は三月中の酉の日を選び執行了た處から俗に酉の祭と稱されるが現在四月十五日に行はれ、本宮より大明神の御靈代を奉安した御神輿を前宮に遷座する祭典で、往古は七五個の猪鹿の頭を神前に供へ流籠馬の伎を演じたものである。此の祭事に十八ヶ村中より奉仕する當村を俗に御頭郷と云つた處から御頭祭と稱されるのである。

下之宮に於ては御靈代を奉初め秋宮から春宮へ秋には春宮から秋宮へ遷座し秋宮から春宮へ二月一日であるが、秋八月一日の御遷座祭は御神輿渡御の行列に次て大明神夫妻の船遊びを擬した翁、姫を飾つた柴船を曳く處から御船祭と云はれてゐる。又上、下二宮共に大晦日の宵より元旦にかけて參詣するを二年詣と稱し東京の酉の市の如く繰起を罷り終夜境内は人て埋る賑ひを呈する。

其の他蛙狩、田遊、筒粥、野出、御狩、田植、御射山祭の神事等古風の行事は七十に餘るが當社最大の神事は上下之宮共に七年目毎の寅申相當年に執行はれる式年御柱祭である。之は御神殿を新に造營して神座を遷す御造營御遷宮祭の事である大祭の一行事に御柱曳建の儀があつたのであるが後世社殿改築の事止み御柱曳建のみを行ふ事になつた處から御柱祭と稱するに至つたのである。上之宮本宮は山肌近く鬱蒼たる老樹の下に在つて濕潤の氣に富んでゐる處から七年目位には改築

を要したもので著名神社の神殿建替期は次の如くである。

伊勢皇太神宮	二十年
官幣大社出雲大社	三十年
加茂神社	
春日神社	

この起源は平安京創始恒武天皇の延暦二十一年に東夷安倍高丸追討の爲、將軍坂上田村麿が奥州下向の途次神前に日本第一大神なりと加護の祈願を望め、諏訪神社の神職其の他壯夫も多数之に加はり夷地に到りたるが夷の昔を攻めあぐんだ除大明神の御神靈顯現して流籠馬の鎧矢に高丸を斃した、斯くて將軍奥州鎮定歸朝の後此の事を奏聞したるに天皇御嘉納ありて宣示を下し信濃一國に課して七年毎に諏訪神社殿を更新する制を定められた。之實に延暦二十三甲申年の事にして今を距る千百三十七年前である。

斯くの如く信濃一國の奉仕により上下二宮の全社殿を更新したもので、當年は國中建築を爲さず諸材を之が改築に充て且元服冠婚の禮をも休止して其の資を祭費に用ひたが此の風習は今尚本郡には遺つてゐる。然るに後世世事煩雜を加へるに到り二宮はもとより攝社末社に至る迄も建造物を改築する事は勞費共に負擔に耐へざるに到つた爲天正末年豊臣秀吉令を下して舊制を廢し御造營奉仕を諏訪、伊那二郡のみに負はしめたが之は二郡民力の能くする所ではないので上之宮にあつては二寶殿中一殿を下之宮にては二神殿中一社を改築するに止め二社四宮の四隅に御柱を建替へる行事のみは舊の如く是を執行したのであるが現在にては諏訪一郡のみの奉仕となつてゐる。

式典の概要は當年の正月寅申の日上之宮は八ヶ岳山麓御小屋岳より、下之宮は和田峠東俣御料林より四丈から五丈五尺に至る樅の巨木各八本を伐採し剥皮して白木の圓柱とし四月上之宮は神川原(玉川村)に、下之宮は御手洗川に曳出す之を山出しと稱し、五月里曳を行ひ上之宮は初日一及二之神社を、次の日三及四之御柱を建植し、下之宮は先づ御柱

西本を春宮を曳付け神殿の東西南北に建て更に七日して秋宮に同様四本を曳建てる。此の御柱曳行には一柱に付一千人の力を要すると云ひ御頭郷に當つた町村の精悍なる若者が紺の股引法袴二本を以て曳下すのであるが途中木落し等の荒事も行はれて世人之を諏訪の荒祭或は人祭とも云つた。其の他奉納の騎馬行列あり又「一之宮御用」の木札を立て、練歩御柱曳子の長持行列もあり遠く諸國より雲集する參詣者の群を以て諏訪の天地は埋め盡される。

冬季諏訪湖の堅氷五六寸に眼詰めると一夜怪音を發して氷面上に二三寸の高きに隆起した裂け目を上之宮方面から下之宮方面にかけ南北に生ずるが之を御神渡と稱し上之宮本宮の明神が下之宮の妃神の下へお渡りになる足跡であると云ふ傳説を生み諏訪神社七不思議の一に數へられてゐる。年々其の方向に多少の相違あり、それによつて其の年の農作の豊凶を下ひ幕府に注進したのであるが現今に於ても毎年宮内省と中央氣象臺に報告されてゐる。又御神渡が現れると危険がなくなくなつたとして水の往來を初め物理的現象であり龜裂は水の腫脹に依り起る物理的現象であり容積増加に伴ひ湖岸四方よりの壓力に耐へず湖心の弱い部分が隆起する結果であつて湖の南北に流入する各二川の水が氷下に流動する爲龜裂に方向を生ずるのであると云ふ。

諏訪の湖水を踏みて渡る瀬も 宗良親王 神も守らば危ふからめや 島本赤彦 健御名方神のみことの神うつり 御座高知りいや古の國 斯の如く諏訪大明神は美濃刈信濃の國の文化開發の祖神であり信濃の國は古事神の國であるのである。 乃に信州の官國幣社としては他に大八洲國の國土生成神である生島神足島神を祭祀した國幣中社生島足島神社(小縣郡東塩田村)及天石屋戸より天照大神を請じ奉り又天孫降臨に陪從した天手力雄命を祭神とした國幣小社戸塚神社(上水内郡戸塚村)がある。

たわんぱく 醉狂生

近頃の世の中が萬事新體制風に變つて來たことは今更述べるまでもない。 専門學校といふところが沙髪へ出てすぐお役に立つ人間を製造する場所であつてみればその對象の動きにつれて學校自體も何とかさといふことについては、考へてみる必要もあるだらうし、考へただけではいけない場合もあるであらう。

けれども時代はたへず歩みつゞけて居り、又社會の要請することからと學校での智識技術とは函數關係をなすものであるから、諸先生方がこれに歩調を合す——嚴密には時代に一步先んじて彼をして合させる——のに並大抵ではないとお察しする。更にその調和も各科教室とも跛行せずに進ませようといふことになれば、何等かの學内再編成でも見ない限り一層御苦勞であらうと思はれる。

ならどうすればよいのか。わたしにはよくわからない。しかも理論と實踐との不一致は往々あるところ、流行追ひは最も戒むべきものの一つ。でも時代はふきはしい、専門學校らしいプラトドを保たせたいのはわたしだけではなからう。

新卒業生の實れ口だけを凡そ學校とあまり縁のない人に話したとしたり、何種の學校か即座にあてるのにマゴつくかもしれない程に複雑怪奇だとなない考へてみた。 誰の責任だらうか。併しいい。時代の流れを認識し夫々の目的に向つて忠實に自己の才能を伸ばさうといふなら結構なこと。だが就職といふものは女房さがしと同じ程度かそれ以上に慎重に構へた方が無難かもしれない。卒業期を控えて必ず迷ふであらう學生諸君に一應考へて貰ひたい。 そして三年間はくんでくれた母校がどんな性質のものであるかといふことについてはむ

ろんどこにめたつて忘れてはいけない。 大學ゆきも多い様だ。人を井戸の中の蛙たらしめない爲にのぞましい。専門學校が例へば「佐渡おけき」といふ一定の型の踊りしか教へないとする。大學では特定の踊りは學ばなくとも踊り全般の「基本型」を習得するだから出てすぐ役に立つことは勘いとしても時間の経過につれて未知な数々の踊りも僅かなヒントでもつてやりこなせる。もちろん大學教育が理想通りに行けばであつて現實についてはいいはない。又専門學校が應用のきかない定型概念にとらわれてゐると言ふ譯ではない。來年度の受験について思案中の學生もあらう。環境のせいか上田人のアンビシャスでないことはこの上ない缺陷だ。受験に勇氣は絶対必要。大學の、或ひは科の選定は恰も好養子にでもりこむ様な立場に於てなされる。

蓋しいづれもたはごとではある。(五二九)

母校便り

修己寮生の自治的修練

自宅通學生を除く各科一年生八〇餘を收容する修己寮は曩に集團勤勞作業學生指導者の講習を受けた寮長大泉和也君(化二)を始め副寮長山中明(蠶二)各室長秋山富士男、廣井周一(以上蠶二)渡邊敬一郎、兒玉忠雄、羽生英司、高淵浩(以上絲二)山上三義、鹽崎深(以上紡二)小池保義(化二)君等が先導となり、從來寮風の舊態を脱して時局學生に適はしい自主的修練を行ひつつあり、賞讃と注目を浴びてゐる。即ち午前六時起床、點呼、掃除、朝の體操から放課後戶外運動、食事後黙讀、九時半消燈迄規律ある日常をなす(外出も平常時午後七時半迄、土、日曜日は十時半迄)外自ら蔬菜園を作り又校内桑園等に勤勞奉仕をなし、精神修練と體位向上と勉勵に精進してゐる。

春蠶 經過

本校の春蠶即ち三年生の原蠶飼育蠶兒、二年生の普通育蠶兒は何れも經過良好で、原蠶は五月十六日掃て大並五齡二日(六月六日現在)、普通育蠶は十七日掃て五齡餵食期である。昨今比較的低温なので經過永びくのが懸念される。

坂口育三助教新任

先頃退職された細川豊助教の後任として纖維化學科に坂口育三氏(蠶二)が五月八日付を以て助教に新任された。同助教は長野縣の出身で、大正三年生、昭和七年上田中學卒、同十年本校養蠶科卒業後二年間本校蠶絲化學教室に助手、同十二年農林省蠶絲試驗場化學部助手、同十四年鐘紡山科理化學研究所社員を勤め現在に至つたもので、新進氣鋭の處で大いに御奮闘を願ふ次第である。

近來にない霜害

新聞紙上に見ると今春の霜害は各地方共大被害の様であるが、本校も空桑園の約二割早生桑が四月廿七日に傷められ、其後五月十五日には一反歩餘を完全に救ふたのみで殆んど全桑園が傷められた。市平、多胡早生、島之内等四反歩は夏秋蠶用に廻し其他鼠返等は梢端伐採速効肥を施與して善後策に努めた。

信武會の講演

五月十五日午後三時より二時間に亘り講堂に於て、信州出身軍人にて組織し軍事思想の普及を趣意とする信武會の講演があつた。即ち演題講師は次の如くて、時局下に於ける青年の血を湧き立たせた。

「時局と青年」 海軍少將 藤森清一郎氏
「信武會概況、事變所感」 陸軍少將 齋藤濟一氏

紀元二千六百年記念植林

昨年校友會の紀元二千六百年記念事業として記念植林を計畫決定したが、去る五月十六、十七、十八の三日間に亘る一年生一二〇名の勤勞作業に依つて之が遂行された。即ち菅平

の官有地積三町歩の雜林伐採跡地を借り受け五十年後伐採計畫で二年生落葉松苗木四五〇〇本の植付を終つた。作業は營林署員の技術指導を受け、文部省體育研究所に宿泊、終始團體訓練的に行はれた。一日降雨に見舞はれたが能率を擧げ既定の作業を完了した。

御親閲記念日慶祝

五月廿三日全國青年學校生徒代表が宮城前にて御親閲を賜はる記念日に本校に於ては午前九時職員生徒一同校庭に集合、記念式を行ひ慶祝の意を表した。即ち國旗掲揚、國歌合唱、宮城遙拜、英靈感謝武運長久默禱、青少年學徒に賜はりたる勅語捧讀、校長の閱兵、分列行進があり、當日に適はしい記念式を終つた。

製絲科三年生校外實習

製絲科三年生三十四名は五月二十三日で第一學期の授業を打ち切り各府縣繭檢定所、各地大製絲場へ二ヶ月間六月一日―七月三十日迄校外實習に出發した。尙其の實習に先立つて十七名宛二班に分れ五月二十六日より三十日迄夫々横濱及び神戸の生絲檢査所に於て生絲檢査實習をなす。

全國聯合織維講演會に校長講演

五月二十五日名古屋市愛知縣商工館に於て日本織維研究聯盟主催の下に開催された第三回全國聯合織維講演會の午前、羊毛、代用纖維の部(午後人造纖維の部)に於て井上校長は「羊毛代用絹絲」と題し講演をなし好評を博した。尙この會には奥、小松兩教授も出席された。

海軍記念日の講演

五月二十八日午前八時半より一時間半に亘り講堂に於て「時局下の我海軍」と題する海軍航空特務大尉小林市雄氏の講演があり、現下歐洲に於ける海軍側戰況、支那事變に於ける海軍の活動、現下列強の海軍準備及其の方向に就いて語られた。

齋藤實教授新任

先頃退職された遠藤保太郎教授の後任として蠶絲試驗場技師齋藤實氏が五月二十九日付

本校教授に新任された。同教授は静岡縣の出身で、明治三十七年大正十三年濱松一中卒、昭和三年松江高校理甲卒、同六年東京帝大農學部農學科を卒業し同七年農林省蠶絲試驗場場長となり、同八年同場技師となり、同十二年同場技師となり、現在に至つたもので、教育に亦研究に大いに御期待す次第である。



行元教授松代で講演

本校行元自忍教授は埴科郡教育會の招聘に應じて五月三十日松代高女に開催された同郡中等教員總會の席上で二時間に亘り一轉換期の指導原理と日本道徳に就いて講演し大いに啓發する處あり、好評を博した。

購買班の賣店一時閉鎖

新學期の四月初旬生活部購買班が開設した學用品賣店は生徒、殊に新入生に歡迎利用されてゐたが休暇等を控へ一寸閑散になつたので一時販賣を打ち切る事とし五月末日を以て賣店を閉じた。其の二ヶ月間に於ける業績は實に見るべきものがあつた。

學生の簡閱點呼

學生で本年の簡閱點呼當者である西野久(蠶一)、鷹野陸二郎(蠶三)、高松公一(蠶選)字郎良三(蠶一)、丸山伊平(蠶一)の五名は五月三十日本校配屬の高木大佐に依つて簡閱點呼を執行され成績良好であつた。

蠶二原蠶飼育見學

目下春蠶飼育中の養蠶科二年生は前後班交代で六月五日前班は小泉、大坪兩副手、翌六日後班は蒲生教授、堀江副手、引卒、野六縣蠶業試驗場上田支場、鹽尻村藤本蠶種株式會社に原蠶飼育状況を見學した。尙長野縣染

新任御挨拶

謹啓 時下新緑之候各位益々御清祥之段奉賀上候、陳者小生儀今回不圖本校教授を拜命致候に就ては微力乍ら職責に全力を盡す覺悟に御座候間何卒今後共宜敷御指導御支援の程御願申上候
先は御挨拶迄如斯御座候 敬具
昭和十六年五月 養蠶科 齋藤實

新任御挨拶

謹啓 時下初夏之候同窓生各位益々御清祥之段奉賀上候、陳者私儀繭紡山科理化學研究所在職中は公私共格別の不圖母校助教に蒙り拜命し後輩の教育に微力を盡す事と相成候に就ては今後共倍舊の御指導御鞭撻の程奉懇願候
先は御挨拶迄如斯御座候 敬具
昭和十六年五月 纖維化學科 坂口育三

御挨拶

謹啓 時下初夏之候先輩各位益々御清祥之段奉賀上候、陳者吾等母校在學中は種々御指導を賜り難有御厚禮して母校に勤務致すことと相成候に就ては今後共不相變御指導御鞭撻賜り度奉懇願候
先は御挨拶迄如斯御座候 敬具
昭和十六年五月 纖維化學科 遠藤恒久

本會記事

本會日誌

五月八日 故田中福雄氏外一名の遺族へ有志
弔慰金贈呈す。
五月十三日 田口富五郎氏の令聞急逝せらる
電報にて弔意を表す。
五月十四日 青森縣三本木町の大火に際し鈴
木雄七氏へ近火見舞の電報發信す。
五月十九日 故菅澤隆三氏遺族へ有志弔慰金
贈呈す。
五月二十八日 故西谷剛一氏外一名の遺族へ
有志弔慰金贈呈す。
五月三十日 事務員杉山雪子氏就任す。
五月三十一日 事務員宮原トク氏退職す。

訃後資金應募者

(頭書ニ2トアルハ第二回離出者)
2金貳圓也 高木 三治
計金貳圓也
累計金壹千百參拾八圓也

會費領收

(六月八日現在)

昭和十五年會費金四圓也
堀 忠太郎(絲九) 横山 良毅(蠶三)
入會金完納者
宮川 政男(絲六) 今田 達夫(蠶六)
未納會費納入者
金四圓也(昭和十六年度分)市村尙文(紡七)
金四圓也(昭和十四年度分)横山良毅(蠶三)

叙任辭令

現職員之部
從七位勳六等 和田 主計
敘正七位(四月二十三日)
正六位 倉澤 美德
敘從五位(四月十五日)

齋藤 實
齋藤 實
任上田蠶絲專門學校教授 敘高等官六等八級
俸下賜(五月二十八日)
正四位勳三等 井上 柳梧
敘從三位(六月二日) 坂口 育三

任上田蠶絲專門學校助教授給六級俸(賞八日)
舊職員之部
地方商工技師從六位 早乙女 新一郎
高等官四等特選、敘正六位、九級俸下賜
(四月三十日)
公立中學校教諭 小澤 丘
願ニ依リ本職ヲ免ス(五月二十一日)
從七位 小澤 丘
敘正七位(五月二十日) 幸養生之部

地方農林技師
勝又 藤夫
寺島 親雄
高等官四等特選
地方農林技師
新庄 哲二郎
安川 重寛
西川 安太郎
石島 綱治郎
萬石 網治郎
福島 綱治郎
宮川 繁治
北島 正生
土屋 卓三郎
櫻井 卓三郎
地方商工技師
織田 博
高等官六等特選
地方商工技師
野澤 泰治
敘從五位(三月十五日) 公立實業學校校長 藤原 卓之
八級俸下賜、年功加俸年額金百四拾四圓下賜
(三月三十一日) 公立實業學校教諭 浦山 藤吉
七級俸下賜 公立中學校教諭 吉田 隆雄
十級俸當分千七百拾圓下賜(以上三月二十一日)
地方農林技師 山崎 傳
十級俸下賜(十五年十二月二十四日)

愛知縣新城農蠶學校教諭 齋藤 會
公立實業學校教諭ニ任ス、高等官七等特選、
右同校教諭ニ補ス(五月十日)
從五位勳六等 高須 兵司
敘勳五等授給賞章(五月九日)
蠶絲試驗場技師 高須 兵司
飯坂支場長ヲ命ス(五月十四日)
長野縣農林技師 坂田 武
地方農林技師ニ任ス、高等官八等特選
右同縣技師ニ補ス、十二級俸下賜(五月十五
日)
地方農林技師 欠保田 正樹
七級俸下賜(五月十四日)
願ニ依リ本職ヲ免ス(五月十五日)
正六位勳六等 篠田 平三郎
敘從五位 正七位 川村 吉太郎
齊藤 格次

佐藤 俊郎
副手ヲ命ス、製絲科勤務ヲ命ス(五月十日)
本校辭令

會員通信
日時 昭和十六年五月九日午後六時
場所 東京市神田區明神下寶亭
農繁期を控へ文部省が農林省と協力して急
遽食糧増産に關する會議が開かれ、全國農業
學校長約四百名が第一會議室に集合して職時
下重要協議會が催された。本年は文部省が主
催で午前八時から午後五時半まで晝食三分
の休憩のみ、五月九、十日兩日極めて緊張し
たもので文部、農林兩省の大臣次官、局長、
課長お揃ひでの討議研究でこれまで例を見な
い會をつた。眞に農業教育の重要なるかゝ
る會である。九日會議終了後、林君の
命令で集れの一聲、場所も時間も未定である

校長 千曲會
林新一郎(兵庫) 歴史の古い大校長の椅子
に本年三月披露され、將來恐しく期待されて
ゐる。本會合の主催者で忠實に母校の爲同窓
の爲を考へてゐる。若し此君に手腕ありとせ
ば此の美點がある事と信する。
小笠原安置(朝鮮) 久し振りの面接、腹の
き苦しみを俱にする實踐者であることは想像

が他に見られない和やかな者ばかりである。
唯波多野君(愛媛)、天田吾三郎君(石川)、田
中康雄君(三重)の三君が見えなかつたが惜し
かつたけれど、これは校長千曲會を開くやら
場所やらが不徹底の爲で止むを得なかつた。
殊に當日四百名の學校長が會場からドヤドヤ
と出る混雑には流石の林君の命令も通じなかつ
たのである。
サテ會場から出た我々は何處へ行くか當も
ない。只文部省前の地下鐵に乗つて神田驛で
下車、宛も角田君(孫六)の經營してゐる萬世
軒を探したが田舎者でそれを知つてゐるもの
がない。稻石君(愛知)の後について幾つかの
カードを通つて漸く萬世軒を見つけたが生憎
満員で斷はられた。然し岡君の厚意に依つて
近所の寶亭に辿りついたが七時すぎである。
上下先後輩の區別なく着席の和やかさを見せ
て酒皿の交換が初まつた。何分時局下都會は
飲食物の不自由な點は田舎に居る者の想像外
で、此の會も一人一本と云ふ情けない處を岡
君の眞の厚意により豫想以上配給があつたの
は嬉しいやら感謝の外はない。流石は學校の
先生、蓋と校長連だけあつて羨はよい。教育
者は何處か違つた柔い處に堅い處があるから
頼もしい。席上田附、林君の動議により故佐
谷君(長野)の他界を惜しみ、何時も此の席
に顔を見せる同君の居ないことを寂しく思ひ
込んで眞福を祈つた。
本間直人(宮城) 眞に校長先生型で私は常
に敬意を拂つてゐる。お子さんは大變立派に
成人して帝大、陸士、幼年學校生徒として粒
揃ひの子寶で恐らく我々仲間の隨一と想像す
る。

出来る。朝鮮に於けるナンバーワンたる事は當然である。

石佐一(愛知) 十年一律をモットーとし直實に飾り気ない先生である。我々千曲會に此の先生がなければ寂しい會合になつて終ふのであるが、必ず顔を見せてくれるそして翌朝になれば前夜の騒ぎもケロリとしたもので知らぬ顔の半兵衛である處私に眞似の出来ない眞面目さである。

山本辰五郎(長野) 廿二貫の巨軀、昨午北

於 校 長 榎 野 吉 利
神 田 小 野 止 男
田 林 新 三
寶 會 佐 後 三
新 派 初 身 傳
新 派 初 身 傳
新 派 初 身 傳

海道には歸路偶然に一緒になつて歩いたものだ、校長としては押しも押されぬ型を以て我常にもその態度を教へられてゐる。日本アルプス山麓の主とも言はれ、その土地とは離るべからざる親である。
田附卯一郎(福島) 優しい校長さんである女學校長にでもなれば女生徒から親しまれて困ることと思ふ、柔利なニコニコ主義で恐らく部下も生徒も怒つたことはないだらう。眞にニコニコ主義で學校の經營をなし、その人格で教育してゐること、信ずる。

藤原卓之(岡山) 新校長として初會である大校長型を充分備へてゐるが今頃新校長である。なんでも言ふことは寧ろ遅い位である。青年學校當時多くの事蹟を残した拔擢組であるが此の人に接した我々は何となく頭の下るのを覚える。是れから指導を受けられるかと思へば嬉しい歡迎會である。

小野正男(鳥取) 時局下飲むものが足りないで困つてゐる現在の學校に八ヶ年、早いものである。長男は目下應召中で長女は北海道の方に嫁に行き近く孫が生れるさうである。お爺さんになる様な顔はしてゐない、近く關印地方を旅行したいと云つてゐた。
櫻井吉利(鹿兒島) 鹿兒島の市來農學校で鍛えられただけあつて卒先窮行家である、恐らく鹿兒島で君を知らぬ者はない。先年君に案内された農場の施設を見た時我々君に大部教へられた許りでなく自分等のやつてゐる學校經營が恥かしかつた程である。
佐藤俊三(新潟) 君子型校長で手ぬかりと云ふよりも人格を以て學校の經營に當つてゐる人である。斯う云ふ校長でなければ眞の校長ではない。若し先生と名のつく者があれば佐藤君の外にはあるまいと思はれる位である。そして剣道は三段位で此の學校の生徒も吃度剣道が上達してゐること、思はれる。

鎌谷傳(岐阜) 研究家である。校長などは大抵チャランプランのものであるが君は忙中閑をとりに常に研究し著書を出してゐる。此の點我々は敬服してゐるので將來必ずや拔擢せらるゝ事と思つてゐる。
土岡光郎(廣島) 何が面白いか何時もニコニコ嬉しさうな顔をしてゐる。兩眼を三日月形にして笑つてゐる處は君の生徒を引き込む優れた處と思ふ。一度君の學校を參觀したら君の學校の生徒はニコニコ笑つて學業を勵んでゐること、思ふ。

波多野君(愛媛)、天田君(石川)、田中君(三重)の三君を入れて十五名。此際謹んで故佐谷戸君の英靈に對し哀悼の意を表す。(校長千曲會一同)

蠶二八會

東島帽子岳の残雪未だ消えず、北風寒き冬の名残りも未だ去りやらぬ早春三月眞田城下に三年の線に別れを惜みてよりはや二ヶ月有餘の月日は流れた。
目まぐるしくあはたしき時の歩み、ゆらゆらと陽炎がたちのぼり、爛漫たる城趾の櫻花も散りはて若葉に彩られた五月十九日青柳二宮、山上の三君を上田に迎へた吾等母校残留組は久方振りに想出の喜樂にて蠶二八會を開催した。

友遠方より來たる亦快ならずや！精神的にも肉體的にも試練を餘儀なくされ多少の變化あるは否めないが、各人獨自の人生觀に傾聴する時、在りし日の面影を髣髴たらしめるものがあつた。徴兵検査の結果發表等々と與深く感激と興奮の場面が繰り繰りげられ和氣室内に満ち背の更くるを知らず、寄書の後母校萬歳を三唱して閉會した。



計報

弔慰金募集

故 佐谷戸健次郎氏 (蠶一)
故 中島俊秋氏 (蠶九)
故 渡邊雪雄氏 (蠶廿四)
故 佐谷戸氏、故 柏倉氏は六月末日、故 島氏、故 渡邊氏は七月末日迄に取纏め御間に合ふ様振替口座東京四三三四一番へ各故人に對する弔慰金の旨御記入の上御拂込下さい。
昭和十六年五月 千曲會

有志弔慰金に對する 遺族よりの禮狀

昭和十六年五月十五日
千葉縣東葛飾郡行徳町關ヶ島一三
故 田中 福雄氏 長男 田中 弘一
靜岡縣藤原郡勝間田村靜谷一〇四三
故 大石 卓壽氏 長男 大石 浩史
昭和十六年五月二十三日
東京市澁谷區代々木大山町慈光台
故 菅澤 隆三氏 長男 菅澤 弘典

弔慰金報告

故 宮川 誠彦氏 弔慰金 (六月八日 現在)
金 參圓也 高木 三治 山岸 松次
金 貳圓也 塚田 証春 須田國之助
右合計金拾圓也
故 佐谷戸 健次郎氏 弔慰金
累計金六拾四圓也
金 拾圓也 信濃雞鳴會 兒玉 信尊
金 五圓也 湯川 秀夫 原田 兵衛
金 參圓也 網村 貢 鶴田 定平
金 參圓也 須田國之助 高須 兵司
吉田 榮治 唐澤 正平

- 金貳圓也 酒井 末吉 福谷朝太郎
- 遠藤 文平 塚田 征春
- 鎌谷 傳 齋藤 鳳一
- 高木 三治 櫻井 吉利
- 永田 平
- 近藤 正己
- 濱井 壽夫
- 金壹圓也 濱井 壽夫
- 右合計金七拾六圓也
- 累計金參百圓五拾錢也
- 故柏倉豐吉氏弔慰金 金貳圓也 金崎 眞英
- 金貳圓也 小松 茂久
- 右合計金五圓也
- 累計金拾五圓也
- 故中島俊秋氏弔慰金 金貳圓也 會田 誠司
- 金貳圓也 内藤 康三 長谷川敏文
- 右合計金七圓也
- 累計金拾六圓也

嘸渡邊君

戸塚生

渡邊君は稍卵形をした紅顔の美青年であつた。美人薄命は女のみならず男にも適用されるものだ。美青年諸君は優生學上感心されたい存在だらう。

同君は入學當時は佐藤雪夫であつた福島の優等生で無試験入學組で勤勉其のものゝ勉學振りで終始一貫した前途囑望されて止まない青年であつた。農學校出身者は一年入學當時英語數學で苦杯を嘗めるものであるが、然し中學出身者も大部分は苦杯を嘗め未だに和田仙先生と原田先生の部厚い眼鏡の底に細く笑つた眼が如何に發汗の原因であるか誰しも御承知と思ふが、佐藤雪夫君は決して英數で困難せず堂々一年より優等の榮冠を確保して居つた君だつた。

秀才にあり勝ちなエゴイズムの處もなく眞面目に實に感心せられる日常生活を送つて居つた自分は常に彼に學ぶ點多きを痛感して居

つたものである。

君が二年の時養子に望まれ美しい貞操と結婚し其日から渡邊雪夫君となり且つ級友を尻目にチヨンガー組を脱會したのである。

辯論部のトーチカ連が東北に巡廻講演の折奥さん見物に立ち寄つた逸話も今は思ひ出話になつてしまつた。

優等で卒業後君は級友の衆望を擔つて農林省に就職された、其れ以來眞に級友を代表して良く農林行政に活躍されて居り吾等片辭な田舎に立て能る田舎武者等は誰も君が大成を願つて止まなかつたのである。

農林省に奉職中は愛妻と共にスイトホームを營まれ家庭にては既に良き父であつた君は内外共に幸福に恵まれて人生のスタートを切つたのである。されど優れざる健康の君は職務の爲に過勞となりたるにも不拘旺盛な責任感と精神力は君をして不幸に終らした原因となつたのであらう。仆れて後已む不細の精神を持つ君は健康勝れざる時如何ばかりか焦慮した事であらう。病める細線のある者は君が苦衷を察して餘りあると思ふのである。

役所を休み勝ちなりし君は遂に漸念して郷里福島市に戻り専ら療養を旨として再起を志したのであつた。必ずや君は再起されるであらうと一同意を強うしてゐたのであるが遂に能はず吾等級友は最も喝望して居つた一人を此處に失つたのであつて、惜みて餘りあり痛惜の念言語に絶するものである。

私は昨年東北に職を奉せし時君が病床を見舞はんと念願して居つたのであるが、吾亦健康勝れず遂に機を失し郷里にて君が計報を知り深く「悔いて居る次第である。人の命のはかぬさを嘆いた人の多きも宜らかなと思はれ會ふ可くして會はざりし已が逸機を残念至極に思ひ且つ今更乍ら君が靈に深く詫びる次第である。

さて君が遺児に思ひを寄せる時君の冥福を祈ると共に一日も早く健康に幸福に成長される事を願ひ涙を禁じ得ざるものがある。

此處に拙筆をとり君が靈に捧ぐ。

會員動靜

(六月五日)

- 小見 益男 (蠶三)
 - 岸 善亮 (蠶九)
 - 深田 銀作 (蠶二)
 - 清水 衛敏 (蠶二)
 - 宮川 繁治 (蠶一三)
 - 酒井 嘉美 (蠶一七)
 - 入佐 一郎 (蠶二一)
 - 石原滿洲夫 (蠶二二)
 - 西澤 正一 (蠶二二)
 - 井口 澄男 (蠶二三)
 - 長澤 得榮 (蠶二六)
 - 大西 三郎 (蠶二七)
 - 井上 一郎 (蠶二五)
 - 北村中太郎 (蠶七)
 - 合田 信一 (蠶一一)
 - 櫻田 正 (蠶一六)
 - 福井 汎 (蠶一八)
 - 福島 喜藏 (蠶一八)
 - 梅村 義一 (蠶一九)
 - 牧 道男 (蠶二〇)
 - 石井 清六 (蠶二〇)
 - 岩本 賢次 (蠶二一)
 - 小口 宗久 (蠶二五)
 - 藤田 五六生 (蠶二五)
 - 塩入 重雄 (蠶二六)
 - 井上 次郎 (蠶二八)
 - 宇野 修次 (蠶二八)
 - 齊藤猪之作 (蠶二八)
 - 小林九十二 (蠶二七)
 - 吐師 聰 (蠶一九)
 - 岡田 幸一 (紡二〇)
 - 春原 さと (紡三)
 - 藤田志津子 (紡三)
 - 山邊 律子 (紡八)
- (勤)従前通り(住)岐阜市本莊西鏡屋町一丁目
 (住)愛知縣北設樂郡田口町
 (住)新潟縣北設樂郡田口町
 (住)北票街滿炭冠山社宅四〇號
 (住)岐阜縣蠶業試驗場(岐阜市外那加町)
 (住)片倉、紀南製絲所(和歌山縣日高郡湯川村)
 (住)農林省農政局農業保險課(東京市麹町區大手町)
 (住)東京市中野區新山通三ノ三八
 (住)從前通り
 (住)從前通り
 (住)農林省蠶絲試驗場松本支場(松本市四ツ谷)
 (住)松本市西埋橋七九宮城縣互理蠶業學校(宮城縣互理郡互理町)
 (住)互理郡互理町南新町五 佐々木方
 (住)千葉縣習志野陸軍騎兵學校幹候隊二中隊一區隊
 (住)滿洲國牡丹江省牡丹江、滿洲六九〇部隊 (留守宅)富山縣東礪波郡福野町二丁目
 (住)三菱商事株式會社生絲部(橫濱市中區本町四ノ四三)
 (住)三井物產京城支店(朝鮮京城府黃金町一ノ六三)
 (住)片倉、鹿兒島工場(鹿兒島市原良町一六五五)
 (住)片倉、江見工場(岡山縣英田郡江見町)
 (住)同上社宅
 (住)片倉大分製絲所(大分市)
 (住)大分市片倉
 (住)九久組製絲所(群馬縣澁川町上之町電話一三二一)
 (住)澁川町上之町二一九八
 (住)長野縣蠶業組合製絲組合(縣廳議事堂内)
 (住)勤)全國製絲業組合聯合會技師(東京市麹町區有樂町一ノ七)
 (住)千葉縣松戸町一ノ一六七
 (住)滿洲國三江省佳木斯市、滿洲七二六部隊
 (勤)從前通り(住)東京市蒲田區女塚四丁目一ノ三 彌榮莊
 (住)召集解除(住)新潟縣高田市南本町二丁目
 (住)北支、飯沼部隊氣付(留守宅)岡山縣兒島郡福田村呼松
 (住)滿洲國錦州省、滿洲三一八部隊
 (住)片倉島製絲所(佐賀縣三養基郡那桐町)
 (住)滿洲拓植公社北安地方事務所(北安省北安街)
 (勤)從前通り(住)小田原市早川二二〇
 (住)滿洲鐵道聯合會生產部原料課(新京日本橋通三〇)
 (住)北支派遣清水部隊本部
 (住)熊本市西部第二部隊野仲隊二班 (留守宅)石巻市本町四七
 (住)中馬方
 (住)滿洲毛織名古屋支店(名古屋市中區西區光音寺町)
 (勤)ナシ (住)上田市大字常磐城一三八六(生塚)
 (勤)ナシ (住)長野縣小縣郡長窪古町立岩
 (住)滿洲國奉天市大和區淀町七、繪吉莊二ノ三

鹿印純正化學藥品製造發賣元

小島化學株式會社

東京市日本橋區本町三丁目五番地四
 電話日本橋(24) 代表五五五二二二番
 五五五二二三番 五五五二二四番
 五五五三三五番 五五五三五六番
 五五五三五六番 五五五三五六番
 草加工場 電 壱 玉 縣 南 壱 玉 郡 八 條 村
 話 話 草 加 一 七 九 番

御挨拶

初夏の候益々御清榮の段賀上候
 來山梨縣に三年長野縣に二年
 職中は公私共多なる御指導と御
 體を賜はり只感謝に堪はずと御
 任職の都合により退職致し左記
 擔當の御職務に相成候は先般に
 一層の御鞭撻御支授を仰ぎ度切に
 願申上候を以て御禮券々御挨拶申
 上度如斯御座候
 昭和十六年六月
 上田市常入
 保証蠶種共同施設組合上田社
 責任 久保田 正樹
 自宅長野縣小縣郡豊里村
 千曲會員各位

編輯室より

◎ 去年の様に早魁であつては困るが梅雨期の
 じならぬ。精神も怠り出れば、お互が健
 康に送れぬ。精々作物が好く出来、お互が健
 ◎ 神社や祭に就いては縁遠く思ひ郷土の事象
 にもとんと暗いので山本氏の「諏訪神社象
 就て」で教へられる所があつた。三年間社象
 も信州に縁りを持つた各位も面白く讀める
 ◎ 本誌も愈々貧弱となつて嘆く者もあらうけ
 れど經費の點で致し方なし。來月は休刊か

運動用具
 理化器械
 化學藥品
 度量衡
 計量器
 掛圖全般
 は弊店へ

カニ山森日
 ニル田本
 ユニ田本
 顕育運出
 顯機動版
 鏡機具社
 【店理代縣野長】

信濃教育品株式會社
 サトウ商店

東京本店 電話日本橋(24)六六六番
 長野支店 電話二七三四番
 篠井支店 電話一四一四番
 上田支店 電話五七三番
 松本支店 電話五七三番

廣告料

發行部數一回二五〇〇部

裏表紙内面(一回)	貳拾貳圓
裏表紙内面(一回)	貳拾圓
裏表紙内面(一回)	拾圓
中付ノ前後(一回)	拾圓
後付ノ前後(一回)	拾圓
半	一頁料金七ノ割
1/4	一頁料金ノ四割
割引	一〇回連載ハ三割引ノコト 五回連載ハ一割引ノコト

◎ 料金ハ申込ト同時ニ御拂込ミ下サイ
 ◎ 銅版、凸版代ハ別ニ實費頂戴致シマス

昭和十六年六月二十五日印刷
 昭和十六年六月二十日發行 (非賣品)

發行所 上田蠶絲專門學校内
 編輯人 小松 忠 一郎
 印刷所 上田市原町五七九番 二 郎
 印刷所 上田市原町五七九番 九 五
 印刷所 上田市中澤 印 刷 所
 發行所 上田蠶絲專門學校内
 法人 千 曲 會

電話上田四〇六番・六六一番
 振替口座(長野)四三三三番
 振替口座(長野)六二四三番

或はほんの形ばかりのものになるかも知れ
 ない。豫め御了承を願つておく。